

温故知新

くうと学だより

圖文化課文化係 ☎(23)0156

鏡から見える古墳時代の宇土

弥生時代から古墳時代にかけての遺跡で発見される遺物の一つに銅鏡があります。その名のとおり、青銅（銅と錫の合金）で作られた鏡で、多くは特徴的な背文（鏡の裏面にある文様）を持ちます。その文様により内行花文鏡、方格規矩鏡、三角縁神獸鏡などに分類されます。

中国大陸からもたらされた銅鏡

当時の銅鏡は現在のような姿見としての用途よりも、呪具・祭具としての意味合いが強いものでした。東アジア社会の中心国家だった中国王朝（漢や魏など）への貢ぎ物の見返りとして授与された銅鏡は、中国との関係性やその後ろ盾を象徴するものとして、地域の首長が自身の地位や権力の証として保有していました。銅鏡は数世代にわたって受け継がれた後、有力者の墓に遺体とともに納められたため、副葬品として古墳などから発見されることが多いです。

また、同じ鑄型で作られたとみられるそっくりな銅鏡が日本各地の古墳

から発見されています。銅鏡の分布状況からは、日本列島における地域間の流通や、ヤマト王権を介した銅鏡の分配などが垣間見え、当時の社会構造を知る重要な手がかりとなります。

宇土で発見された銅鏡

宇土市内でも、複数の銅鏡が発見されています。県内最古の前方後円墳といわれる栗崎町の城ノ越古墳（三世紀後半）では、直径約22cmの三角縁神獸鏡が出土しています。その名のとおり、縁の断面が三角形に見える特徴的な銅鏡で、邪馬台国の女王卑弥呼が中国の魏から贈られた「銅鏡百枚」もこの種類と考えられています。邪馬台国を中心とする政治連合であるヤマト王権との関係がうかがわされる貴重な発見といえます。

松山町の向野田古墳（四世紀後半）では、中国製とみられる三面の銅鏡が出土しています。これらは、埋葬された遺体の頭部を囲むように置かれ（写真）、その種類は、内行花文鏡、方格規矩鏡、鳥獸鏡と呼ばれるものです。数



城ノ越古墳出土の三角縁神獸鏡（宇土市指定有形文化財）

中央の鈕の周りに人形の神と靈獸（中国における空想上の動物）が4体ずつ描かれている。

種の銅鏡によって頭部を囲む配置状況から魔除けの意味があったと考えられます。

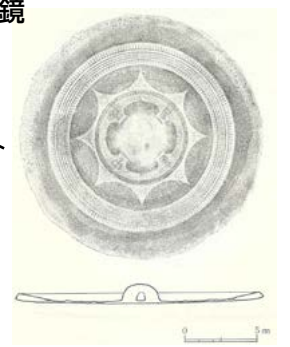
こうした銅鏡が宇土に残されていることは、中国から銅鏡を受け取った人物や集団とのつながりがある人物が宇土周辺にいたことを示唆しています。銅鏡の最初の持ち主や、宇土の古墳に納められた経緯は不明ですが、今回紹介したわずか四面の宇土の銅鏡の背景には、日本や中国をめぐるスケールの大きな歴史が隠れています。



方格規矩鏡
方形の区画とT・V・Lに似た文様で構成される鏡。



頭部を囲むように配置された3面の鏡（向野田古墳 国指定重要文化財）



内行花文鏡
内に張り出す連続した弧（曲線）が特徴的な鏡。連弧文鏡とも呼ばれる。

【お知らせ】

現在、熊本県立装飾古墳館（山鹿市）で企画展「鏡のかがやき」が開催されています（2月9日まで）。宇土市城ノ越古墳の三角縁神獸鏡をはじめ熊本県内で発掘された銅鏡30面が一堂に公開されています。ぜひお出かけください。